

IV-33

コンパクトシティにおける高齢者居住について

秋田大学 学生会員 ○野村 崇司

秋田大学 正会員 木村 一裕

秋田大学 フェロー 清水浩志郎

1.はじめに

わが国は今後高齢化のスピードがさらに加速するとともに、人口の減少傾向が始まる。このため、これからの都市のあり方としてコンパクトシティの必要性が指摘されている。高齢者が都心に住むことは、さまざまな活動ニーズを充足できるなど、利便性において優れているが、一方において地域に居住する人同士の交流の機会を減少させる恐れがある。

本研究では、都心のマンションに居住する高齢者・非高齢者を対象に、都心居住における利便性の評価、交流の状況やニーズ、交流のための空間整備について、アンケート調査を行い、コンパクトシティにおける高齢者の居住環境、特に交流環境について考察することを目的としている。

2.調査概要

本研究では、秋田市をはじめとして日本海側の積雪地を対象にアンケート調査を行なった。アンケートの回収者は高齢者 49 人、非高齢者 69 人である。

表-1 調査概要

調査日	2004年1月上旬	
対象者	秋田市・山形市・富山市・福井市中心部にある高齢者用マンション居住者 秋田市中心部にある一般マンション居住者	
データ数	120人（男：42% 女：56% 不明：2%）	
調査方法	マンションへのポスト投函	
配付枚数	693枚	
回収率	高齢者用マンション：40部（33.1%） 秋田一般マンション：80部（14.0%） 合計：120部（17.3%）	
調査項目	・外出の状況 ・都心居住において重要視していること・評価 ・人々との交流活動の実態 ・人と交流を図る・促すための方法について（ハード面） ・共同スペースを設けたマンションの提案 ・属性	
年代	非高齢者（60歳未満）	69人（57.5%）
	高齢者（60歳以上）	49人（40.8%）
	不明	2人（1.7%）
車の保有率	非高齢者（60歳未満）	55人（79.8%）
	高齢者（60歳以上）	22人（44.9%）
一人暮らしの割合	非高齢者（60歳未満）	31人（44.9%）
	高齢者（60歳以上）	32人（65.3%）

3.都心の居住における利便性の評価

図-1 に都心居住における利便性の評価を示す。ほ

とんどの項目に対して意識にあまり差はなく、スーパーや勤務先、病院など日常生活に必要な施設への近さや、除雪の負担が少ないこと、公共交通が便利なのが重要視されている。高齢者にとって大事な要件として「友人や知人の家が近いこと」があげられており、高齢者の交流ニーズがうかがえる。

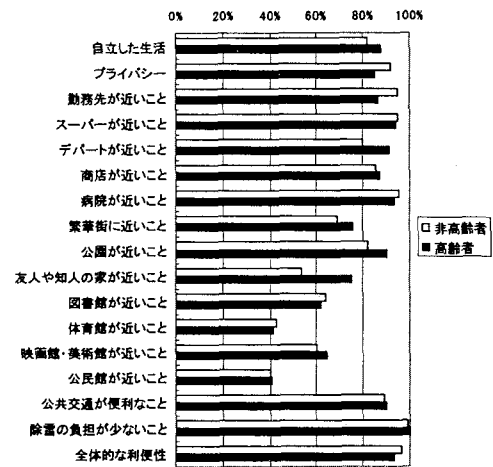


図-1 都心居住における利便性の評価

4.都心における交流活動について

(1) 交流の変化

図-2 にマンションへ移り住む前と現在を比べての交流の変化を示す。特に地域活動が大きく減少し、友人との交流も若干減少している。全体として高齢者の方が減少の割合が高い。

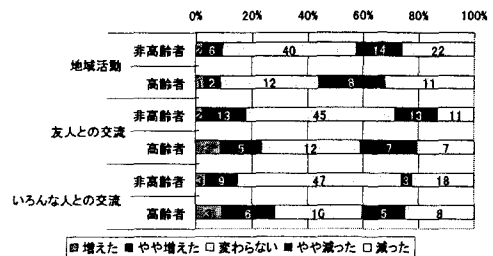


図-2 交流活動の変化

(2) 交流の重要度評価

図-3 に非高齢者・高齢者別に交流の重要度評価を示す。「地域の人と親しくなること」を含め、どの項目も重要度が高い。また非高齢者より高齢者の方が重要とする割合が高くなっている。特に「街で出会った人との会話」は非高齢者と高齢者で重要度に大きな開きがあり、高齢者が人との交流を強く望むことが読み取れる。

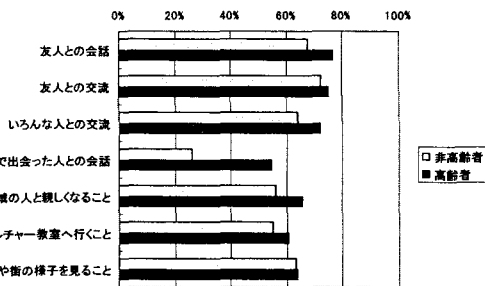


図-3 交流の重要度評価

(3) 高齢者が人と交流する空間

図-4 に高齢者で交流が活発な人が交流のために利用している空間を示す。カルチャー教室・サークルでの交流活動が多く、公園や公民館よりも交流の輪を広げるきっかけとして利用されている。また友人との交流では飲食店・喫茶店の利用が多い。

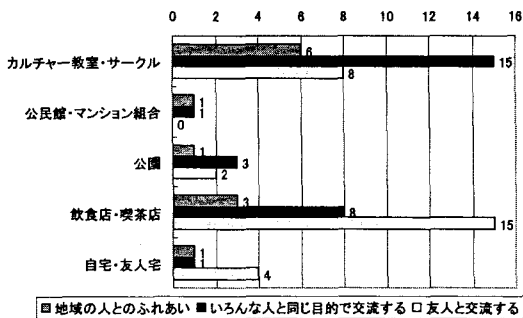


図-4 交流空間(複数回答)(回答が多い項目を抜粋)

(4) 交流が活発・不活発な人別のニーズの違い

図-5 に交流活動が活発な人と不活発な人のハード面におけるニーズを示す。「気軽に行ける場所」「施設内で座れる場所」は活発・不活発によらず重要とする割合が高い。全体的に交流が活発な人ほど重要とする割合が高く、交流の活発な人で特に高い項目としては「情報発信センター」や「スカイウェイ」「ア

ーケード」など都心地区における活動を支援する施設が求められている。

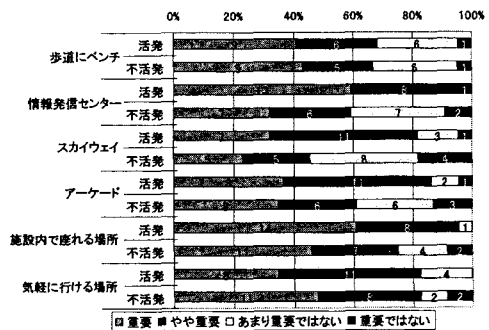


図-5 ハード面 6 項目の重要度

(5) マンションにおける共同スペース設置の評価

アンケートではマンションに共同スペースを設けることについて質問している。これに関しては高齢者の方が積極的な評価が多かった。高齢者の中には「1 人暮らしのため、誰かと一緒に食事したい」という意見があった。非高齢者は高齢者よりも若干低評価であったが全体的にいいと思う人が多かった。

5.まとめ

本研究では、交流空間整備の観点から都市中心部における交流空間整備の考察を目的とし、アンケート調査を行った。分析結果より、高齢者は交流が不活発な人が多く、非高齢者より交流を重視することが分かった。交流が活発な人がより交流を図るためには、行事やカルチャー教室、サークルなどの情報を発信する施設が必要であり、その施設は高齢者にとって気軽に行けること、休憩機能を備えることが望まれる。マンションに共同スペースを設ける提案は、高齢者の方が重要視しており、今後の高齢社会において住民との助け合いがより重要となれば、共同スペースが果たす役割は大きいと考えられる。

今後の課題として人々との交流が不活発な人への交流の魅力の伝え方が考えられる。

《参考文献》

- 1) 浅井容子：高齢社会において都市中心部に求められる諸機能に関する研究（平成 11 年度秋田大学卒業論文）
- 2) 藤田 勝：余暇環境としての河川空間整備に関する研究（平成 6 年度秋田大学修士論文）